リハビリちゃんぷる

第6号

特集記事

- 失語症コミュニケーション講座
- 渡名喜村健康教室
- 座談「離島に住み続ける」
- 渡嘉敷村デイサービス
- 出前介護教室・渡嘉敷村
- 編集後記

失語症コミュニケーション講座

九月十二日（日）におもと園デイサービス室で南部広域支援センター主催の『失語症コミュニケーション講座』を開催した。十五名限定の講座に倍以上の問合せや申し込みがあり、失語症に対するケアについて関心の高さが示された。

参加者は日頃失語症者と関わりのある介護職、看護師、ケアマネージャーなどで、午前九時から午後四時までの講議と演習に真剣に取り組んだ。午後三時からは実際に失語症者と会話をし、その日に学んだ知識を実践する機会もあり、充実した内容であった。

講座は大浜第一病院の言語聴覚士の岸本むつみ氏が企画・運営し、講師も務め、嶺井第一病院や南部徳洲会病院、沖縄メディカル病院の言語聴覚士らが協力して実現した。

「失語症は一般の方だけでなく医療・福祉関係者であっても充分に理解されず、適切にケアされていない場合も多い。」「今回の研修は、失語症について正しく理解し、適切なコミュニケーションをとる方法について学習した。今回だけで終わらずに第二回、三回を開催する予定でいるので多くの関係者に参加してもらいたい。」

第２回 失語症コミュニケーション講座（嶺井第一病院会場）

医療・福祉関係者および一般市民や学生が失語症についての理解を深めることで、失語症者に対して適切なケアを提供され、また社会参加しやすくなることを目指す。

日時　平成16年10月17日（日）
午前９時～午後４時
嶺井第一病院３階図書室（予定）

定員　15名

費用　資料代として
1人1,000円徴収

講師　岸本むつみ（大浜第二病院ST）
阿部信之（沖縄メディカル病院ST）
与座範子、柳川幸子、仲盛美穂
（以上嶺井第一病院ST）

対象　ホームヘルパー・介護士・看護師
ケアマネージャー・保健師・リハビリ関連職種・その他の医療福祉関係者及び学生

美しいフクギ並木

渡名喜村健康教室

九月十三日（月）渡名喜村の生活習慣病・健康教室が開催され、南部広域支援センターから岡本慎哉（大浜第一病院）が講師として派遣された。渡名喜村は人口四七七人だが、成人を対象とした住民検診の結果、高脂血症や高血糖、動脈硬化、高血圧などの生活習慣病危険因子を有するものが五十人以上に昇り、早急な対策の必要性が指摘された。生活習慣病・健康教室は役場民生課の大城松子保健師が担当し、運動と栄養について計六回の教室を計画した。今回が第一回目にあたり、運動指導・栄養指導を三回づつ開催する予定。

教室は開校式のあと、体力測定、生活習慣病と運動についての講議、運動実技を約三時間にわたり行った。運動は糖や脂質の代謝を高め、減量に効果的なウォーキングを中心に、筋力トレーニングやストレッチを混ぜた実践的な指導を行い、参加者は気持ちの良い汗を流した。

運動指導は十月と十一月にも予定されているがその間、参加者は自主的に運動を続ける決意を表明した。

座談

『離島に住み続ける』

九月十四日（火）、渡名喜港からフェリーで那覇に戻る船上で沖縄大学社会学の上地武昭先生、琉球大学法科大学院の比嘉正先生にお会いした。お二人とも別々の用事で渡名喜島に滞在し、偶然一緒の便に乗り合わせることになったもの。

比嘉先生は渡名喜島の出身で、高校生から島を出なければならないことが若者の「島離れ」の大きな原因になっており、島で高校教育が出来るような施策が必要と持論を述べた。上地先生は県内の多くの離島に共通する課題として「若者の仕事がない」「高齢者が安心して住み続けるための医療や福祉の充実が必要」と指摘した。

多くの高齢者が出来れば島に住み続けたいと願っているが、島には充分な介護サービスがないために、やむなく本島内の子供宅や病院施設で生活することを選択せざる得ない現状。

美しい民家が保存されている町並みが続く

那覇～渡名喜～久米島を結ぶ
フェリーなは

島に介護施設や在宅サービスを整備することで要介護高齢者が島で暮らせるだけでなく「仕事」を創出することができる。高齢化率５０％を超える島は多いが、このような島で公共投資を道路建設に使うのではなく「介護サービスの基盤整備」や「島の住民のみならず県内外から田舎暮らしを望んでいる中高年者のための住宅を整備する」等のアイデアが考えられる。

県や市町村、民間の医療・福祉機関が官民一体となって「離島に住み続ける」ことについて議論する機会をぜひ作りたいと、揺れる船内で話が盛り上がった。上地先生、比嘉先生とも県や市町村の保健福祉計画等に関わることも多いので、今後の話の行方に興味をもって見守りたい。

行って来ました!! in 渡嘉敷

渡嘉敷デイサービス

九月十四日（水）に渡嘉敷デイサービス事業に南部広域支援センターから岡本慎哉（大浜第一病院）が今年四回目の協力を行った。渡嘉敷村などの離島では民間の介護保険サービスが成立しにくいため、村や社会福祉協議会が直営のデイサービスを行っているところが多い。

「デイサービスの利用者の訓練を担当する」ことは原則的に広域支援センターの事業に含まれないが、離島の特別な事情を考慮して行って良いと沖縄県から認められ、平成十五年度から月一回ペースで協力しているものである。

午前九時の泊港発の高速船に乗ると三十五分で渡嘉敷港に到着する。港にはデイサービスの職員が車で出迎えてくれるが、歩いたとしても十分はかからない距離にデイサービスセンターがある。センターに到着後お茶を一服した後、午前中に二時間、昼食をはさんで午後に二時間みっちり個別訓練を担当する。

離島のデイサービスの特徴として、脳卒中等の重度障害が少なく、膝痛や腰痛を主訴とした軽症者が多い。重度の障害があると離島で暮らせないということである。デイサービスの利用者は主に七十～八十歳代だが、日頃は畑仕事もしているお達者さんも含まれる。膝・腰・頸・肩関節の痛みや運動障害の整形外科疾患に対して、家庭でできる体操の指導や、PTが来ない日にセンターの看護師等にやってもらう物療などのアドバイスを行うが「できるだけ元気で活動し続けられるように」全身の筋力強化やバランスの訓練、体力維持を目的とした運動指導も意識して取り入れている。

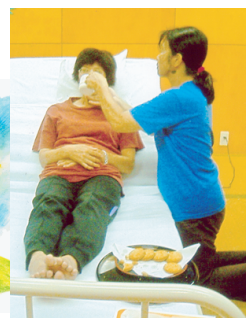
離島で暮らす高齢者にとって「健康」や「自立した生活」は切実な問題であるためか、利用者の運動に取り組む真剣さは日頃都市部では経験しない程である。家庭で行う自己訓練を指導すると、一月後には筋力やバランスが驚くほど向上しており、毎日一所懸命体操していることが分かる。職員もアドバイスの一言一句を聞き逃さないように真剣にメモをとる。それだけ、離島において私たちリハビリテーション専門職の関わりが不足しており、そして期待されているのだなあ、と改めて責任の大きさを感じる。

出前介護教室『渡嘉敷介護・リハビリ講座』

九月十四日（水）の午後七時から九時まで渡嘉敷村デイサービスセンター会場において広域支援センター主催の出前介護教室（講師・岡本）を開催した。今年三月ごろより南部二十市町村に対して「現場で困っていることについての研修」の希望を募っていたが、渡嘉敷村では「介護技術の基本」について依頼があったことから今回の介護教室を企画した。と言っても企画、参加者募集、会場設営などの準備すべて実質的には渡嘉敷村デイサービスの職員が行い、講師の岡本は当日話をするだけであった。興津、比嘉、中村、小嶺さん、ごくろうさまでした。

平日の夜間であるにも関わらず予想を超えた十七名の参加があり、充実した研修を行った。好評であれば次回も考えたい。また、村役場の保健師と看護師も受講し、「次は保健師企画の研修会も考えたいね」と活動に手応えを感じた。

一泊した十五日に渡嘉敷島を後にしたが、「ぶどうの木」のPT宮里朝康氏と港ですれちがった。氏は保健師の担当している機能訓練事業と家庭訪問で渡嘉敷村に関わっており、この日も日帰りで島に来たのだった。各自忙しい業務を割いて地域に離島に貢献している。おもと会も、もっと「地域に貢献し、信頼される活動」を広げたい。



広域支援センター活動と離島支援

地域リハビリテーション広域支援センターの活動は、以下が定められてる。

①機能訓練事業などの市町村事業に講師派遣協力

②特養などの施設や在宅サービス等ならびに地域住民を対象とした研修（研修会の実施／施設に出向いての指導／大浜第一病院への研修受け入れ等）

③地域の「リハビリに関する相談」にかかる支援

④当事者会や家族会の支援、関係機関との連携

大浜第一病院は沖縄県南部圏域・広域支援センターの指定を受けているが、南部圏域は二十市町村のうち七市町村が離島という特徴を持つ。（久米島町、渡名喜村、座間味村、渡嘉敷村、粟国村、北大東村、南大東村）そこで、南部圏域広域支援センターは活動基本方針に「離島支援の強化」を掲げた。

現在の離島支援

●久米島町
大浜第二病院・新垣栄子
大浜第一病院・仲田多津子

●渡名喜村
沖縄リハビリテーション学院・天願
大浜第一病院・岡本

●渡嘉敷村
大浜第一病院・岡本

●南大東村
大浜第二病院・糸山

以上が実践活動を行っており、地域に貢献している。

今後ともご協力よろしくお願いします！

編集後記

今回は離島における広域支援活動の紹介を行った。沖縄県南部圏域には七つの離島町村があるが、本島に比べてリハビリ・ケア資源が不足しており、高齢者や障害者が島に住み続けるための支援体制は充分ではない。『高齢者や障害者が、そこに住む人々とともに住み慣れた地域で一生安全に、イキイキと暮らせるように支援する』ことが地域リハビリテーション活動の理念である。離島であろうと都市部であろうと、自分が住みたい場所に住むことができるような社会になってほしい。

渡名喜島からの帰りの船でご一緒した沖縄大学の上地先生、琉球大学の比嘉先生がおっしゃるように、島で暮らし続けるためには、リハビリテーションや介護体制の整備だけでなく、教育や就労、住まいなど多くの課題がある。同じ目標に向かう仲間として教育、就労、住居、島興しに関係する分野のみなさんと一緒に島の暮らしに貢献出来ればと思う。